

新刊紹介

K. Jaspers: Vernunft und
Widervernunft in unserer
Zeit. 1950.

此の小著は、著者がハイデルベルヒ大學に招かれた時の三日間に互る講演内容である。科學性の探求・理性・理性の戰の三章に分れてあるが、之等を通じてヤスバースは、哲學が理性の哲學であることを述べ、哲學の根源的本質たる理性を強調するの急務たるを説いてある。彼の哲學に於ける理性の重要性は Vernunft und Existenz (1935) 以來説かれてある如く、それは、「實存の道具」であり、「あらゆる包括者の諸様態の紐帶」であり、「實存は理性によつてのみ明白となり、又理性は實存によつてのみ内容を得る」。理性は本來の根源ではなく、自ら何物をも作りはしないけれども、凡ての眠つてゐる根源を目覺まし得る。それは何物をも落さず、何物をも排さず、破壊的なものにも存在の光をもたらし、それに

言葉を籍し、共存する。理性はあらゆるものを孤立せしめず、wirklichな統一を求める。それ故に、理性は無制限の交渉 Kommunikation の意志であり、又その場である。Kommunikation は、時の中に於ける眞理顯現の形姿であり、時間の中に於ける人間によつて、眞理は Kommunikation に於て成る眞理である。

扱、理性は自然によつてあるのではなくて、唯、決意によつてのみ現實的となる——即ち、自由に於て喚起される。決意とは、人間社會に直面して、自らの欲する處を知る、個人の「自らへの歸屬」(Zusichkommen) に於て意識される。何故なら、理性への決意の歩みは、自然に對し生起に對し必然的なものに對するものであり、引受くべきものゝ選擇に於て罪を認めることが決意であり、罪の意識に於て始めて人間は自由だからである。

かゝる理性の敵は何か。それは非哲學の精神であり、眞理の名の下に眞理ならざるものを適用させんとする、而もその力は、我々の中にある begehren するものから發する。何故にかゝるものゝ Begehren があるのか。理性が人間の

自己存在によつて擔はれず、充たされないので、悟性に滑り落ちる時は、常に此の悟性の世界から、耐へ難い不満が生れるのである(其處では理性は最早理解されず、空虚な抽象の世界に體重ねられて行く形式の様に思はれる)。その衝動が我々を驅つて、想像上の眞理へ、非理性的なものへ、不條理なるものへと——而も理性の言葉を利用して——進むのである。即ち、理性の哲學に對する非哲學であるが、それは、無力な Nichigkeit ではなく、強力な魔術である。此の魔術師の權威によつて保障されてある宗教の代用品として、ヤスバースは Marxism と Psychoanalyse とを擧げてゐる。

マルキシズムと精神分析とは、共に科學を基礎として持つ。マルクスはすべてを經濟學的・社會學的認識によつて設立し證明し確立せんとする。しかし彼を其處に至らしめたのは、「事態は最後の變革に直面してゐる」といふ根本的意識である。それはいはゞ一つの信仰——神への信仰ではなくして、科學と實踐との統一、Einheitswissenschaft への信仰といつてもよいであらう。それは、何等の超越者

も知らぬ Materialism の現實性から導かれる綜合知 (Totalwissen) であり、其處では如何なる科學もむしろ特殊のなりとて斥けられる。而もかゝる信仰自體が、政治的にプロレタリアの獨裁を目的とする。マルキシズムは科學の名の下に科學を否定するといはねばならぬ。マルキシズムがその活動するに當つて、個的認識によらずして、非科學的性格を持つた全體觀と信仰とによつた如く、精神分析に於ても同様の事が見られる。それは醫學的領域に於ても誤謬があるに拘らず、醫學を遙かに超えて、人間の本質的存在についての綜合知を要求し、認識と自由とを混同して、人間把握の Totalisierung を試みるのである。

科學がなければならぬといふ獨自の意義は、科學からは基礎づけられ得ない。マルキシズム精神分析といふ信仰の代用物の誤謬は、又、獨自の「科學」の下に眞正なる科學を拒否するといふ誤謬である。のみならず、其處には、根本傾向として、自由から免れんとする衝動がある。本質的な自己存在の可能性が、想像上の歴史のために、心理的に認められた現實

性の爲に忘れようとされるのである。此の衝動が、即ち、反理性的精神につながるものといわねばならない。

今日、理性の思惟は——逆説的な言葉で言へば——孤獨に追込まれてゐる様に思はれる。又、理性の哲學は altnodisch な啓蒙時代の、傳統的な時代遅れのものとして非難され、敬遠されてゐる。併し我々は、誤れる信仰に對して一つの信仰——理性の信仰を打建てなければならぬ。それは、信仰告白により、客觀性により、保證によつて規定されてゐる信仰とは異り、宣傳せず、暗示せず、且 greifbar なものを與へはしないが、その信仰のある處、それは最も深い基底に於て不屈であり、柔軟である。それは既に前著 Der philosophische Glaube (1947) に於て見られるが、ヤスパースは、此の書では更に、魔術師に對する哲學者の使命を強調し、理性の戦の場としての大學の重要性を述べてゐる。蓋しそれは、如何なる哲學も、魔術を驅逐しなければ眞とはならないし、又、理性の地位を守ることが、理性自身によつてのみ可能だからである。(阿部)

輪廻轉生の主體

深浦正文著

何が生死に輪廻し、何が淨土に往生するかについての問題を佛敎學的にとりあつかつたもの。(一) 輪廻轉生の語義 (二) 輪廻と靈魂 (三) 無我的強調 (四) 輪廻と無我との矛盾 (五) 業感緣起說 (六) 賴耶緣起說 (七) 小結 (一七年九月刊・B 6 一〇八頁・一〇〇圓・永田文昌堂)

四譯唯識二十論研究

宇井伯壽著

梵文及び魏譯・陳譯・唐譯の四文を和譯して對照し、各譯の異同出沒を詳細に論じたもの。なほ最後に二十論の唯識說が究明され、梵語語彙・梵文正誤補正表が附されてゐる。(一八年三月刊・A 5 二四九頁・五五〇圓・岩波書店)

二つの世界

曾我量深著

本書は昭和二十五年六月武生淨秀寺に